



中日新聞東海本社  
浜松市東区葉新町45番地  
〒435-8555 電話 053(421)7711

しずおか

2017年(平成29年)  
2月10日(金)

# ソプラノノ渾身の響き

子どものころポリオ(小児まひ)に感染した人が、中高年になって筋力の低下や萎縮が生じる病氣「ポストポリオ症候群(PPS)」。患者で焼津市の声楽家、山口久美子(みづこ)さんが一月末、静岡市葵区でリサイタルに臨んだ。身体障害者手帳一級を持ち体調に不安があるため、大規模なリサイタルは今回が最後。普段の生活ではつえや車椅子が手放せないが、この日は立ったまま歌い、渾身のソプラノを響かせた。(池田知之)



美声を響かせる山口久美子さん。いすとピアノに手を掛けて体を支えた＝静岡市葵区のしずぎんホールユーフォニアで

四百人を超える観客で埋まったコンサート会場。山口さんはピアノに右手、いすに左手を添え、透き通るソプラノの声で表現豊かに歌い上げた。拍手が続く中、ステージから降りた山口さんは、楽屋前で大勢の人たちと抱き合って成功を

## 聴衆400人超 最後の舞台、立ち姿

ポリオ 口から入るポリオウイルスが原因で、感染者の一部に手足のまひが残る病氣。日本では1960(昭和35)年、ポリオ患者の数が50000人を超え大流行したが、ワクチンにより沈静化しており、80年を最後にポリオウイルスによる新たな患者は発生していない。パキスタンやアフガニスタン、ナイジェリアなどの海外では現在も流行している。ポストポリオ症候群はポリオの再発でなく、ポリオによる2次障害であるため他人への感染はない。根本的な治療法はないという。

喜んだ。山口さんは生後十カ月の時、ポリオを発症。手足にまひは残ったものの「子どものころはマット運動や鉄棒もできるほど」と重い後遺症ではなかった。幼いころから歌や楽器が好きだった山口さんは、短大で声楽を学び、静岡を拠点に音楽活動を続けてきた。三十一歳のころ体に異変が表れた。両脚に違和感が残った。「ずっと痛みはあったけれど、調子が急に悪くなってしまった」と振り返る。当時は、静岡市清水区(旧清水市)の公民館の講座で結成された合唱団の指導に忙しい日々。病院で診察を受けてもはっきりとした原因が分からないまま、痛みやまひはひどくなるばかりだった。PPSと診断されたのは五十二歳の時だった。ベツドから起床しようとした瞬間、脚に力が入らない。一週間入院してようやく判明している。

それでも、静岡市清水区や藤枝市で活動する三つの合唱団での指導は続けてきた。「ただただ音楽が好きだから。理屈ではない。合唱がより良く仕上がっている過程や、団員とのコミュニケーションが楽しいから続けられる」。リサイタル当日、共演したバリトン歌手の大石陽介さん(左)と島田市には「歌には心や人柄が出ている。山口さんの歌からは人を思いやる気持ちが伝わってくる」と話した。山口さんは「まだまだ活動は続けたいが、体の調子が不安。ポストポリオに向き合いたい」とリサイタルは最後と決めた。合唱団の指導は大石さんや、同じバリトン歌手の三浦正貴さん(右)と藤枝市に少しづつ引き継ぎ、三人の孫との時間を大切にしたいと考えている。

し、ひどく疲れやすくなっ